

## ～「漢字かな交じり」絵本での読み聞かせを、子どもにしませんか～

「読み聞かせ」の利点と「漢字教育」の利点を活かした「漢字かな交じりの絵本」での読み聞かせは、子どもの一層の成長につながる有効な取り組みです。その理由は次のものです。

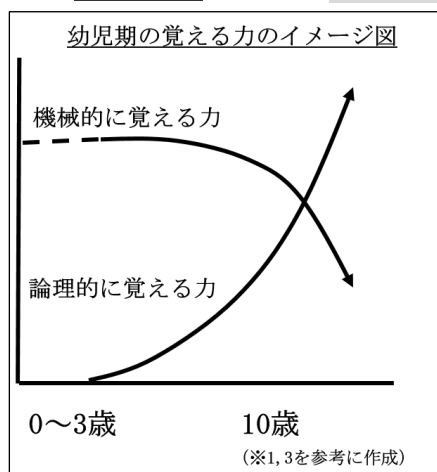
### < 幼少期だからこそ有効な漢字での教育について >

子供たちが、成長の過程で身に付けなくてはならない大切な能力の一つに、「言葉の能力」があります。その「言葉の能力」の教育について、漢字での教育が有効と云われています。(例：石井式漢字教育法) その理由について以下で述べます。

#### 1 漢字教育での語彙力向上について

表意文字とも云われる漢字は「目」で理解する言葉(視覚言語)です。一見複雑そうですが、それ故に識別しやすく、かつ具体的な意味や内容を表わしているため、**幼児には絵を見るのと同じように理解**されます。一方、音節文字であるひらがなやカタカナは抽象的で一字一字に意味は無く、耳で理解する言葉(聴覚言語)となります。※1

また、**五感による知覚**の割合として、聴覚の11%に対し、**視覚は83%**となっており※2、この点でひらがなよりも、**漢字という視覚言語が認知されやすい**といえます。



そして幼児の覚える力において、**0~3歳をピークに10歳頃までがもっとも高く**、これを「**機械的に覚える力**」ともいい、興味があれば何でも即座に記憶してしまう**丸暗記能力**です。※1,3 この丸暗記能力に対して、8~9歳頃からは育つ物事を論理的・体系的に理解し認識する能力を「**論理的に覚える力**」といいます。※1,3

**幼児の機械的に覚える時期**に、認知されやすい漢字という視覚言語を活用して、**言葉の豊かな子にする**ことにより、早くから論理的に覚える力が高まり、結果として優秀な子に育ちます。

#### 2 漢字での教育(例：石井式)の取り組み内容について(※1 抜粋)

上記理論に基づいて行われている漢字教育の一例(石井式漢字教育法)を紹介します。

##### (1) 漢字を教える教育ではなく、漢字で教える教育

「**漢字かな交じり文**」の教材(絵本・カードなど)を活用し、自然に覚えるような仕組みで、早い時期ほど負担が少ないとされます。

##### (2) 子どもの特性を活かした取り組み

大切なことは、幼児の大好きな「**繰り返し**」を続けた結果、学習が習慣となることです。よい学習も、習慣として身に付いた時に、その効果が現れてきます。**子どもたちが楽しく続け、習慣化**できる取り組みを行います。

上記1~2を踏まえ、丸暗記能力の優れた時期に有効的な「漢字かな交じりの絵本」などの漢字での教育を行うことは、言葉豊かな子どもの成長につながるでしょう。

※1 石井式漢字教育オフィシャルサイト [www.ishiishiki.com](http://www.ishiishiki.com)

※2 「産業教育機器システム便覧」(教育機器編集委員会編 日科技連出版社 1972) p4

※3 [暗記とは - コトバンク \(kotobank.jp\)](http://kotobank.jp) 日本大百科全書の解説

## <幼少期だからこそ行うべき読み聞かせ・読書習慣化について>

幼児教育では、子どもたちの脳の成長を大きく促すことが大切です。それには読み聞かせや読書活動の習慣化を図ることが重要です。その理由について以下で述べます。

### 1 読み聞かせ・読書が言語能力に関する脳の神経回路を発達・成長させる。

- (1) 調査研究により、読書をたくさんしていた子ども達ほど神経線維ネットワークの結束力が強く、さらに3年後の神経回路の発達度合いも大きいという事が明らかになりました。脳科学的には、**読書を通した言語能力に関する神経回路の強化**が「頭の回転の速さ」につながる可能性があるかと云えるとされます。※1 p98-p100
- (2) **読み聞かせ**によって、脳のコミュニケーションの中でも**聞くことに関する部位**が集まる「側頭葉」と、**感情反応や記憶に関わる領域**の集まりの「大脳辺縁系」と呼ばれる部分で**強い活動**が見られ、それらの神経回路の強化につながります。※1 p126-p128
- (3) その他、脳科学では、**児童虐待が被虐待児の脳の成長に悪影響**を与えることも明らかにされています。例えば、暴言虐待による聴覚野容積の拡大や両親のDV目撃による視覚野容積の縮小をもたらし、うつ病やPTSD、認知機能の低下を引き起こします。※2
- (4) 上記(1)～(3)を踏まえ、**子どもの脳の成長は、子育て環境次第**で変わっていきます。

### 2 幼児の読み聞かせが「将来の学力」を上げる。

- (1) 1を踏まえ、**読み聞かせを通じて**言語、感情、そして他者の心の状態についての理解といった社会的認知に関する様々な脳の部位の活動を起こし、**言語発達やその後の学力**、ひいては**自己実現に寄与**します。また、幼児の言語発達の促進により、コミュニケーション等が円滑になり、**問題行動が減少**するともいわれます。※1 p149-p154
- (2) 読み聞かせ頻度について、ベネッセの調査から年少から年長のどの年齢でも週に1日以上読み聞かせる家庭が半数以上です。またOECDの報告書では、毎日ではなくても**週に1、2回の頻度以上**で読み聞かせを行っている子どもは、その後の学力に違いが出てくることと示されています。ただし強制するものでなく、自然なコミュニケーションの中で行うことが適切です。※1 p160-p164

### 3 読み聞かせなどでの読書習慣化は、小学生の学力向上につながる。

- (1) 各家庭の社会経済的背景の影響を考慮した場合であっても、**小学生の学力に一番影響**するのは家庭での「**読書活動**」であると明らかになっています。※1 p114
- (2) 仙台市の児童の実態調査によると、小学5、6年生で**偏差値平均が最も高かった**のは一日の「**読書1時間以上、勉強30分～1時間**」※1 p60-p62となり、摂津市でも一日の読書時間が「1時間以上、2時間より少ない」や「30分以上1時間より少ない」と回答している児童の学力が高い（但し、学習時間は長いほど学力は高い。）との結果になっています。※3

上記1～3を踏まえ、是非、読み聞かせを行って、子どもの一層の成長を促していきましょう。

※1「本の読み方」で学力は決まる 川島隆太監修（ニッセイ・DS脳トレリズ監修）青春新書 2018.9.15

※2「被虐待者の脳科学研究」児童青年精神医学とその近接領域 57(5), 719-729, 2016 友田明美

※3 摂津市議会 2020年第3回定例会一般質問 議事録